

随 筆

夢について

長縄 慎二

健康文化も50号の記念であるので、夢について考えてみたい。

夢とは、大きく言って睡眠中にみるものの意味と、実現させたい理想という意味の2つがあるが、本稿では後者について、考えてみたい。不思議なもので、英語の dream にも両方の意味がある。この話題を取り上げる理由は、いつからか、若者が夢を語る事が少なくなったと感じるからである。人に自分の夢を語る事が恥ずかしいことと社会でみなされるようになったのか、そもそも人に語るほどの夢を持たなくなったのか。。。最近の子供の将来の夢が、地方公務員になることであったりするのは、そういう世相の現れかとも思う。

世の格言にも、急がばまわれとか、slow and steady wins the raceとか、地道にこつこつとやっていくことの重要性を持つものが多い。特に日本の社会では、出る杭は打たれるとか、村八分とか、目立つことを嫌う風潮があり、協調性や無意味なまでの平等偏重がみられる。残念ながら、この国は、社会や大人が子供の夢を潰すことに必死になっているように思えてならない。もちろん夢を追うのにも地道さは必要であるが、夢の実現には、地道さと、大胆さのバランスが大切であることを教えたほうが良いと思う。

アナと雪の女王というディズニーのアニメーション映画が世界中で大ヒットしたが、多くの国では子供に受けたのに、日本では大人の女性に受けたのが特徴的であるとのことである。この映画のモチーフはLet it go (ありのまま)であり、如何に日本の女性が、ありのままに生きることを制限されているかの裏返しとも言える。

日本に限らず世界的に先進国では、高齢化が進み、地球規模の温暖化や気候変動、食糧問題、エネルギー問題など、このままでは、人類の未来は持続可能とは言えなくなってきた。いまこそ、科学技術のみでなく、政治や社会制度などの、あらゆる領域においてイノベーションが必要となっている。歴史を振り返れば、科学技術の場合、多くの場合イノベーションは、遊びや夢などから発生し、政治や社会制度の大きな変革は、残念ながら、多くが戦争や革命で

もたらされてきた。

我々の医療界に目を向ければ、医療安全向上や、医療の質の均てん化が重視され、マニュアル化や標準治療、ガイドラインといった個々の医療者の裁量を制限する動きが目立つ。もちろんある程度の医療の標準化や手順の整理は必須であるが、あまりに細かいところまで規定してしまうと、個々の医療者の創意工夫意欲はなくなっていく。また意欲も低下していくであろう。

ドイツ西部のある小さな町では、「共有空間」という考えのもと、交通事故防止のため町の中心街の信号・標識をすべて取り除き、歩行者が歩きやすい環境を実現し、交通の安全性を高めた。

「共有空間」は、オランダの交通の専門家が考案した思想で、「信号や標識がないほうが人々が慎重になり、危険を回避しようとする心理が働き、交通行動も改善される」というものであり、その方法で、オランダでは事故件数が着実に減少している自治体もあるとのことである。

交通量や人口密度などに違いがあり一概にはいえないが、日本の場合、事故が起こると信号・標識が増える傾向にあり、正反対の考え方といえる。医療においても、事故が起こるたびにマニュアルが増えたり、手順の整備が進むが、これもきっとある極点を過ぎると、事故防止効果に陰りが見えてくると予想する。どこかで逆転の発想が必要になるのかもしれない。

夢を語ることは、時にマニュアル化やガイドライン、エビデンスといった最近の医療の潮流に反する。しかし、夢を語らなければ、きっと実現できないことがたくさんあると思う。

50年以上前、アメリカ大統領ジョン・F・ケネディは次のように述べて、世界の夢をふくらませた。「我が国は目標の達成に全力を傾ける。1960年代が終わる前に、月面に人類を着陸させ、無事に地球に帰還させるという目標である」。こうして、ムーンショット（月ロケットの打ち上げ）という言葉は、「困難な、あるいは莫大な費用のかかる取り組みで、実現すれば大きなインパクトが期待できるもの」を意味する用語となった。

アメリカの大企業のトップは、このムーンショットを掲げることが多くなってきた。10%の売上増加というような日本的な目標ではなく、10倍の増加というような、根本的な変革がない限り達成できない目標を立てることがムーンショットと言えよう。グーグル社は、完全自動運転の車の開発やグーグル

グラスといった皆の生活を根底から変えるような技術の開発を行っている。アップル社も iPhone, iPad のように人類の生活に変化をもたらす商品を開発した。最近の日本でのムーンショットは、リニア新幹線くらいであろうか。

夢を語り続けることは、時に現実との狭間で、辛くなることがある。

読者は、アラン・シェパードという名前を聞いたことがあるだろうか？

この人はアメリカの宇宙飛行士で、1961年、マーキュリー計画でアメリカ人として初めて宇宙へ出た人である。マーキュリー計画の7人のエリート宇宙飛行士（マーキュリーセブン）に選ばれた卓越したパイロットである。ライトスタッフという映画にもなっている。このアラン・シェパードは宇宙に出た後、メニエール病を発症し、地上勤務を余儀なくされる。しかし、この病気になっていなければエースパイロットとして、アポロ1号に乗っていたかもしれない。アポロ1号は、ご存知のように事故で爆発し、乗務員が死亡した。その後、アラン・シェパードは屈辱的な地上勤務に堪えながら成功するかどうかわからない内リンパ嚢開放術を受け、訓練を重ねて宇宙飛行士に復帰した。そうして、アポロ13号のクルーに選ばれるも、中耳炎で搭乗が延期となった。しかし、アポロ13号は映画にもなったように宇宙には出たものの事故で月には行けず、かろうじて地球に戻ってきた。そしてついに、1971年、アラン・シェパードはアポロ14号の船長として、月面にたった5番目の人類となった。そして、彼は、月でゴルフをした最初の人類となった。まさに彼の人生はどんな困難にも負けずに夢を持ち続けた見本のような人生であった。また、不幸の裏には幸運があることも示している。夢を持ち続ければ幸運の女神が微笑む。そう信じたい。

私が26年前に放射線科医になったばかりの頃、抱いていた夢は、カテーテルを動脈に入れずに冠状動脈狭窄の診断をすること、と、メニエール病の内リンパ水腫を画像化することであった。当時、自分が現役でいる間は無理であろうと思っていたが、冠状動脈については、2000年頃からマルチスライスCTの登場で可能となり、現在では世界中の病院でルーチンに行われている。メニエール病の内リンパ水腫診断も数年前に名古屋大学で実現され、今年から日本の複数の施設で、通常の検査として行われるようになった。若い人は、ちょっとやそっとでは実現できないと思われるような夢を持ったほうが良さそうである。それほど、技術は進歩している。夢を持ち、それを語りましょう。有言実行！

(名古屋大学大学院医学系研究科量子医学分野 教授)